

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 25 日現在

機関番号：15201

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2013

課題番号：23520433

研究課題名(和文) 柳宗元集本・原本三〇巻本に関する文理融合型研究

研究課題名(英文) Interdisciplinary research on the original edition 30 volumes of LiuZongyuan's works

研究代表者

戸崎 哲彦(tosaki, tetsuhiko)

島根大学・法文学部・教授

研究者番号：40183876

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,800,000円、(間接経費) 1,140,000円

研究成果の概要(和文)：劉禹錫は柳宗元より遺稿を託されて30通に編集した。それは現存しないが、現存する他の多くの宋代の版本とその註や総集等に反映されている。最も直接に継承するのが南宋永州33巻本(1165年,1208年)である。現存するのは数巻の残葉に止まるが、楊守敬の抄録(1917年)で巻16「序上」がほぼ復元可能であり、さらに蓬左文庫蔵金沢文庫旧蔵の音辯本45巻本の鈔本(1312年)に加えられた校注は同じく金沢文庫旧蔵の永州33巻本を用いたものであり、これによって相当数の所収作品と異文とを知ることができる。その他、音辯本鈔本は『音註唐柳先生文集』からも抄出するなど、柳集研究にとって極めて高い資料的価値を有する

研究成果の概要(英文)：LiuZongyuan consigned his own posthumous manuscript to a special friend LiuYuxi in 819, the edited book containing 30 volumes by LiuYuxi is now missing, but it was included in many other editions and the annotations in the Southern Song Dynasty. The book which inherited the original edition most directly, is the Yongzhouben 33 volumes published in 1165-1208, however there remains only several pieces of the volumes. I have found vol.16 transcribed in 1917, and the textual annotations on one of the Yinbianben editions which was transcribed in the Kanazawa library in 1312. Now it is in the Hosa library, and has been appended using the Yongzhouben collected in the Kanazawa library too. Building on this book we can restore a great deal of works and characters in the original book, edited by LiuYuxi. Excepting this, the transcription of Yinbianben is valuable material for studying all works of LiuZongyuan, because of the textual annotations of other transcriptions like the Yinzhuben edition.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学 各国文学・文学論

キーワード：柳宗元 増廣註釋音辯唐柳先生集 永州本 金沢文庫 蓬左文庫 音註唐柳先生集

1. 研究開始当初の背景

唐宋より韓愈と柳宗元は古文作家として併称されてきたが、文化大革命期(1966-76)における儒法闘争を契機として両者の評価が反転し、以来、柳宗元研究は今日に至っても盛んであるが、研究の最も基礎にある版本鈔本等の文献研究は極めて不十分であった。しかも使用版本は南宋版の詁訓本・百家註本・五百家註本・鄭定本・世綵堂本等の45巻本と音辯本の43巻本であり、劉禹錫が柳宗元から託された遺稿を編集したとされる30巻本、一に32巻本、33巻本に作るが顧みられることはなかった。

2. 研究の目的

劉禹錫編集本は現存しないが、作者自ら託した遺稿を編集したものであるならば、数ある版本の中で最も重要である。45巻本と43巻本および30巻本はいかなる関係にあるのか。43巻本は「非國語」2巻を別集として正集から除いたもので、それを含めば45巻となるが、30巻本もただ分巻だけの問題であるのか。劉禹錫編集30巻本の原型に迫ることで、柳宗元研究の基礎たる版本研究に新しい局面を開きたい。

3. 研究の方法

我が国に南宋永州で刊刻された33巻本が残巻残葉であるが現存する。それは劉編30巻本を継承していると思われるが、今日、『柳集』研究の最高峰である呉文治『柳宗元詩文十九種善本異文匯録』でも活用されていない。また、43巻本も45巻本とは系統を異にするから、より30巻本を反映しているのではないか。『文苑英華』にも校註に「永州本」が見え、張敦頤『柳先生歴官紀』にも「三十通」の記載がある。さらに現存する諸本およびそれに見える宋人の諸注や文安礼「年譜」等にも30巻本は反映されているのではなからうか。国内外所蔵のマイクロフィルム等を含む関係資料を広く収集して30巻本との関係を検討し、永州刊33巻本を補足して行くことで『柳集』三〇巻本の原型に迫る。

4. 研究成果

(1) 30巻本を反映している現存本。

南宋の詁訓本・百家註本・五百家註本・鄭定本・世綵堂本・音辯本等45巻本。音辯本の通行本が43巻本であるが宋版は詁訓本等と同じ45巻本である。詳しくは後述。これらはいずれも北宋の沈晦編45巻本(1114年)を底本とし、穆修編45巻本(1031年)を祖本とする。沈晦本は穆修本を元符間(1098-1100)京師刊33巻本・曾丞相家本・晏元献家本等北宋本3種によって校勘・編集・補遺したものであり、したがってこの系統にある45巻本には33巻本が吸収されている。33巻本は劉禹錫編30巻と『非國語』2巻、「外集」1巻から成る。つまり30巻本は45巻本の中にある。巻39「為裴中丞上裴相賀破東平状」は音辯本巻首「目錄」の同作の下に注「依京本附此處」。「京本」とは元符間京師刊33巻本を指す。ただし元符京本は沈「序」

によれば訛誤が多く相当乱れた一本であった。それは他の3本が曾丞相・晏元献・穆修の家本であるのと異なり、校正の手が加えられず写書して伝わったものを刊刻したことに因る。

45巻本の所収数は沈「序」によれば「外集」を含み計674篇。ただし詁訓本が各巻に示す所収数の累計では679篇、実数は計676篇、いずれにも合致しないが、巻15「一十首」を「三首」、巻26の「十一首」を「一十首」、巻37の「三十首」を「三十四首」、巻39の「二十一首」を「二十二首」の誤字脱字と考えるならば実数に等しく、また「省試」詩一首と「畧民詩」一首が後に加えられたとすれば、沈晦の云う所に近くなる。

沈晦本の「外集」2巻計26篇は穆修45巻本に未収の作を他の3校本から補遺したものであり、33巻本に含まれていた可能性が高い。「披沙揀金賦」等3賦は省試での作にして『文苑英華』に収める所であるが、他に「吾子」「劉叟傳」「河間傳」「箏郭師墓誌」「趙秀才群墓誌」「太府李卿外婦馬淑誌」、また長安時代の「表啓」の他に「賀裴桂州啓」「與衛淮南石琴薦啓」「答鄭員外賀啓」「答諸州賀啓」がある。

『新唐書』(1060年)本伝所収作品。『舊唐書』本伝には柳集を40巻とするが、『新唐書』の「藝文志」には30巻と記載されているから同書の本伝も30巻本に基づく。本伝中に「與蕭翰林俛書」「寄許京兆孟容書」「貞符」「懲咎賦」を節録。また「倣離騷數十篇」とは固より概数であるが、45巻本巻2の「古賦」は計9篇に過ぎない。「十數」の顛倒か。また伝記は「先侍御史府君神道表」にも拠っている。

本伝は宋祁の撰であり、宋祁には手書「集外文」1巻があったが、元符京本は『新唐書』の後の刊刻であり、その「外集」1巻はこの系統であろう。宋祁は他人の作が多いことを指摘しており、淳熙十二年(1185)に陸游がその多くが正集に編入されているというのは45巻本の系統を指し、具体的にはその「表」を指す。

『文苑英華』所収作品。北宋・勅撰『文苑英華』(987年)所拠の『柳集』底本は『崇文總目』・『新唐書』・『藝文志』・『宋史』・『藝文志』に著録する30巻本であり、現存の南宋『文苑英華』(一部明版)にはそれが反映されている。ただし編集には取舍選択があり、網羅するものではない。ちなみに所収は200篇、詩はわずか1篇のみ。沈晦本674篇から詩151篇を、さらに『非國語』67篇を除けば456篇。文の収録は45巻本の半分以下。

南宋・永州刊本。全33巻にして巻31・32が「非國語」、巻33が「外集」であること、また底本が州学所蔵本であることから、劉禹錫原編30巻本を伝える。現存本には次の二種があるが、いずれも残巻。

乾道元年(1165)葉程序刻本、北京図書館蔵:「外集」35葉、「後序」9葉。

嘉定元年(1208)汪楫重刻本、静嘉堂文庫蔵：巻 29「状」2 葉、巻 32「非國語」下巻 10 葉、「外集」28 葉。

後者は金沢文庫旧蔵。蓬左文庫蔵金沢文庫旧蔵の音辯本の鈔本でも校勘に使われている。『経籍訪古志』(1856 年)当時には大半が散逸し、巻 14 から 18 と巻 29 から 32 及び「外集」の計 10 巻が存在。

45 巻本には 33 巻本の外集にあったものが混入しており、30 巻本の一部は 45 巻本から永州本外集を除いたものの中に求めることができる。永州本外集所収で 45 巻本正集に見えるものは計 34 篇。共に外集にあるものは 8 篇。

楊守敬『留真譜』(1917 年)巻 10。金沢文庫旧蔵南宋永州本から巻 16「序上」の「目錄」部分を含む 1 葉を抄録。これによって 30 巻本巻 16 の編次が復元可能である。

南宋本『文苑英華』(1204 年)刊本中の校註。その中の「永本」「永州本」は南宋永州本を指す。「弔葛弘文辭」「伊尹五就桀讚」「師友箴」「送寧國范明府序」「祭呂郎中文」「楊氏子承之哀辭」計 6 篇 8 箇所。

鄭定『重校添註』本中の校註。巻 13「亡妻弘農楊氏誌」に「元符京本“雖”下空一字」、また巻 1「獻平淮夷雅表」に「一本此「表」在第五卷；蜀本此「表」重出在三十八卷；邵武本(張敦頤註本)在三十八卷，卻作「進平淮夷雅表」。45 巻本で「表」は巻 37・38。詁訓本は巻 38 に「進平淮夷雅表」があり、題下註に「已見第一卷首」というのは「蜀本此「表」重出在三十八卷」を指す。現存本では『英華』が「進平淮夷雅表」に、『全唐詩』が「奉平淮夷雅表」に作る。「一本此「表」在第五卷」は 45 巻本とは編次が異なり、元符京本あるいは 30 巻本系統ではなからうか。また、鄭定本の外集巻下「為文武百官請復尊號表六首」第六表に「一本以上六表在前集」、外集巻下「賀裴桂州啓」以下 4 篇にも「一本在前集」という。これら作は 45 巻本では沈晦補遺の「外集」にあって永州本の「外集」には見えないから、33 巻本の正集=「前集」に在った、つまり劉編 30 巻本に在った。

『音註唐柳先生文集』。今日まで本書の存在は全く知られていなかったが、蓬左文庫蔵金沢文庫旧蔵の音辯本の鈔本(詳しくは後述)巻 2「古賦」の末に「増廣註釋音辨唐柳先生集卷之二」とある後に「披沙揀金賦」「迎長日賦」「記里鼓賦」3 篇を書写して「音註唐柳先生文集卷第二」とし、さらに「『増廣註釋音辨本』無「披沙揀金」「迎春[長]日」「記里鼓」之三賦，今以『音註本』而寫加之。『音註・目錄』云：“今體賦三首”という。この鈔本は日本正和元年(1312)破衲聡達(1280-?)による書写であり、したがって原本『音註唐柳先生文集』は元初以前に伝来しており、また 3 賦の転写部分には宋諱缺筆が見られるから宋代の成立であり、さらに限定すれば、註では註者姓氏を明示せず、かつ沈晦本を底本とした詁訓本系統や音辯本よりも

註数が少ないから、恐らく南宋初期の成立。当時、柳集は 45 巻本と 33 巻本の系統が主流であったが、この 3 賦は 45 巻本では「外集」に収めるから音註本が 45 巻本系統でないことは明らかである。しかし無註本である南宋永州本でもなく、また永州本を底本にして註を加えたとも考えにくい。永州本の「外集」には「送元暲師詩」「上宰相啓」「上裴桂州状」が収められており、これも音辯本には見えないから、この 3 賦と同じように鈔本では補写されていてよいが、そのようになっていない。したがって永州本を底本にしたものではない。ただしそれは「外集」に見えるものであるから、永州本 33 巻本そのものではなく、それと同系統の 30 巻本を底本とした可能性はなくはない。沈晦本「外集」の 3 賦は『英華』の「省試」からではなく、この系統から拾遺してに加えたとも考えられる。ただし「觀慶雲圖」試も『英華』の「省試」に見えるのだが、45 巻本では註に「晏元獻家本有此詩，今附卷末」、また沈晦「後序」に「増入」、つまり「晏本最為精密」とする晏元獻家本に従って外集ではなく、正集に追加されている。

(2) 他の版本・註本等の検討。

文安礼『柳先生年譜』に繫年の作、約 180 篇(『非國語』67 篇は除く)。紹興五年(1135 年)の撰であり、前年に柳州旧蔵本等に拠って刊刻の李漚『柳州舊本河東先生集』(1134 年)に基づく。繫年可能な作に限定されているが、『年譜』中には 45 巻本及びその「外集」に見えないために韓醇が補遺した詁訓本(1177 年)「外集補遺」(新編外集)5 篇中の 4 篇「故連州員外司馬凌君墓後誌」「萬年縣丞柳君墓誌」「處士段弘古墓誌」「潞州兵曹柳君墓誌」が見えるから明らかに 45 巻本の系統ではない。なお、沈晦が補遺した外集 27 篇中の 17 篇を含む。そこで 33 巻本系統が想起されるが、先の原則に反する、つまり沈晦 45 巻本は 33 巻本を網羅しているはずであるから、別系統ということになる。少なくとも沈晦が参考した元符 33 巻本・晏元獻家本等とは異なる。逆に詁訓本は柳州本あるいはその系統から拾遺したのではなからうか。

張敦頤本。45 巻本は劉禹錫「序」に「禹錫執書以泣，遂編次為四十五通，行於世」とあるが、張敦頤「柳先生歷官紀」(1169 年)に「禹錫編次其文為三十二通，行於世」。『直齋書錄解題』巻 16 の『柳柳州集』45 巻・外集 2 巻の条でも劉「序」を引いて「編次其文為三十二通」に作るから、沈晦本の系統には劉「序」を「編次為三十二通」に作るものがあつた。しかし張敦頤「韓柳音釋[辯]序」(1156 年)では沈晦 45 巻本を底本としたことが明示されている。つまり劉「序」で「三十二通」に作る 45 巻本系統の一本を使用したのである。「歷官紀」中に見えるものは約 15 篇、いずれも 45 巻本に収める。

音辯本。従来、四部叢刊等通行の音辯本は正集 43 巻であるために 45 巻本とは異系統であり、また『非國語』を別集として正集に

含まないこと、またその巻首の劉禹錫「序」に「四十五通」とあるが陸之淵「柳文音義序」(1167年)には「柳州内外集,凡三十三通」とあることによって、30巻本系統との関係も想定されて来たが、淳祐九年(1249)劉欽「後序」をもつ劉怡堂輯註45巻12行本の宋刊本が北京大学に現存し、また蓬左文庫(金沢文庫旧蔵)に日本正和元年(1312)金沢学校にて破衲聡達(1280-?)によって書写され、宋諱缺筆する45巻12行本が現存する。したがって音辯本も詁訓本と同じく45巻本を底本とする。ただし詁訓本とそれを継承する百家註本・五百家註本・鄭定本・世綵堂本とは編次・篇名を異にするものがあり、かつ沈晦「外集」を収めるが、詁訓本に始まる「外集補遺」を収めないから、沈晦45巻本を底本とするものであって詁訓本とは姉妹関係にある。

潘緯註本。音辯本は潘緯註を多く取り入れて「潘本作」とあるから音辯本とは底本を異にし、潘「序」によれば底本は「訛舛の少ない」「建寧本」であり、潘緯註本に寄せた陸之淵「柳文音義序」(1167年)に「柳州内外集,凡三十三通」とあるから33巻本系統と推測される。しかし潘註は穆修「序」中にも見えるから底本は明らかに45巻本系統であって33巻本系統ではあり得ない。「建寧」とは恐らく建州が紹興三二年(1162)に昇格した建寧府を指す。その地、建陽県麻沙は刊刻業の中心として有名である。建安(建陽)魏仲舉刻の五百家註本(1200年)はその一つであるが、これ以前の刊本は今日知られていない。時・地を勘案すれば南劍州教授張敦頤註本(1156年)が考えられるが、張本の底本も沈晦45巻本であった。しかし五百家註本(韓柳二集合刻本)は張註を引き、張敦頤「書韓文後」「韓柳音釋[辯]序」「柳先生歷官紀」を附録するが、潘緯註本を吸収している音辯本には張註はあっても「韓柳音釋[辯]序」等を附録しないため、断定はできない。少なくとも建寧本は詁訓本系統とも音辯本とも異なる別系統の45巻本である。

万曆二〇年永州刊『柳文』22巻本。「上宰相啓」「上裴桂州狀外集」等を収めず、南宋永州33巻本を継承するものではない。外集補遺を収めない点、正文の異文から見て最も音辯本に近い。

南宋末・黄震(1213-1281)『黄氏日抄』巻60「讀詩文」の「柳文」1巻の所拠本。60余篇と『非國語』との言及があるが、45巻本の巻1の「眎民詩」「貞符」や巻31の「與呂恭書」「答吳武陵論非國語書」の編次、巻31の「與友人論文書」等の篇名の一致、また「外集補遺」を収めない点から、音辯本に拠ったものと思われる。

『永樂大典』(1562年)所拠本。柳詩文を60余篇節録するが、篇名の一致から音辯本に拠ったものと思われる。

(3)劉禹錫編30巻本の所収作品。

蓬左蔵金沢文庫旧蔵の音辯本鈔本の眉上に「イ」を記した異本の校注があり、現存す

る永州33巻本の残巻と全て一致する。これは金沢文庫に所蔵の永州33巻本によって対校されたもので、約220箇所、140篇近くに及ぶ。その内、詩は6首。『文苑英華』所収は200篇、詩は1首であった。詩を除いた文でいずれか或いは両方に係るものは約250篇。これによって詩を除く所収作品の大半を知ることができる。

(4)30巻本の異文。次の資料によって若干知ることができる。

『英華』の校註「永州」「永州本」。

蓬左蔵金沢文庫旧蔵音辯本の校註。

鄭定重校本は明らかに33巻本を使用しており、それは「一本作」の中で45巻本系統と異なるものの中に在る。

(5)30巻本の編次。その一部を復元あるいは推測することができる。

巻首「序目」：劉「序」によれば韓愈「墓誌」「祭文」を「第一通の末に附す」。韓愈「墓誌」等を載せるものには五百家註本があるが、それは集末の「附録」に収める。『郡齋讀書附志』が「柳先生文集四十五巻外集二巻附録二巻」の条に韓愈「墓誌」等は他本では「附録」に在るといふのがそれであるが、「惟此本在「正[貞]符」之後」といふから、沈晦「外集」をもつ45巻本系統には巻1の「貞符」の後に置く一本があった。音辯本は「眎民詩」の後に「貞符」があるが、詁訓本・百家註本・五百家註本・世綵堂本は「貞符」の後に「眎民詩」があり、鄭定本は「眎民詩」を欠き、永州本では外集にあるから、「眎民詩」は後人がその内容と形式から巻1の末に移したのである。45巻本の巻1は「唐雅唐詩貞符」であって作者の伝記に係る作ではなく、韓愈「墓誌」等が「貞符」の後にあるのは不自然であり、後人が音辯本のように「貞符」を末にする一本に劉「序」に従って入れたのであろう。永州本では集末に「後序」と題して韓愈「柳子厚墓誌」「祭柳子厚文」「柳州羅池廟碑」と宋祁「柳子厚先生傳」(『新唐書』本傳)を収める。「後序」の前半が「第一通末」の内容と一致するから、逆に第一通から移されている。第一通は劉禹錫「序」・「目錄」と韓愈「墓誌」・「祭文」から成る、巻首「序目」の類ではなかったか。

巻1「唐雅唐詩貞符」：「平淮夷雅二篇并序」「唐鏡歌鼓吹曲十二篇并序」「唐貞符解并序」。唐王朝を歌功頌徳する内容にして『詩』雅頌・漢代歌曲等の古雅な形式による作であって冒頭に配されるべき作品である。また、巻2が「賦」であるならば、その前は巻1のみ。

巻2「古今賦」：45巻本系統は巻2「古賦」「賦」として9篇を収める。音註本では巻2に「今體賦」が続き、「披沙揀金賦」等3賦を収める。

巻3「古今詩」上：45巻本では「非國語」2巻の前にあって巻42・43を占めており、30巻本でも2巻を占める分量であったと思われる。詁訓本は巻42「古今詩」に「七十六首」、

卷 43「古今詩」に「七十五首」、計 151 首、実収は卷 42 が柳詩 69 首と劉禹錫贈答詩等 5 首で 74 首、卷 43 が 77 首。沈晦が晏本に拠って増補した「觀慶雲圖」と劉詩 5 首とを除けば 145 首。『直齋書録解題』卷 19 の「『柳宗元詩』」一卷：總一百四十五首、在全集中不便於觀覽、因鈔出別行」に合致する。30 卷本では卷 29 が「状」であるから、それよりも前であり、また一般に賦・詩はまとめて文の前に置かれる。

卷 4「古今詩」下：45 卷本での編次には詠作年代を反映している所があるから詩形による分巻ではない。「覺衰」の鄭定重校本に「韓曰：此詩一本在「游石角過小嶺至長烏村」之前。余謂此詩永州後作也，不應在前」とあるから、韓醇もそのように考えていた。45 卷本ではおよそ卷 42 の前半が永州での作、後半が柳州での作、卷 43 が永州での作であるのは 30 卷本の姿を反映している。本来は卷 42 前半、おそらく 10「零陵贈李卿元侍御簡吳武陵」までの後に卷 43 が続いて上巻となり、次に卷 42 後半 11「界圍巖水簾」以下が下巻となっていた。

卷 5「表」：「獻平淮夷雅表」・「文武百官請復尊號表六首」等。45 卷本では「表」は約 60 篇で 2 巻を占めるが、永州本はその内 27 篇を外集に収める。さらに他人の作の混入を差し引けば、「表」は約 30 篇、1 巻で構成されていたのではないかと推測される。

卷 16「序上」：「崇豐二陵集禮後序」・「西漢文類序」・「濮〔陽吳君文集序〕」・「愚〔溪詩〕序」・「同〔吳武陵送前桂州杜留後詩〕序」・「楊〔評事文集後〕序」・「王〔氏伯仲唱和詩〕序」・「陪〔永州崔使君遊宴南池〕序」・「婁〔秀才花下唱和詩〕序」・「法華寺西亭夜飲賦詩序」・「送〔？〕序」・「送〔？〕序」・「送〔？〕序」、計 13 篇。45 卷本では卷 21 から卷 25 までの 5 巻 59 篇が「序」を占め、編次もかなり異なり、中には一部を「題序」「序別」「序隱遁道儒釋」と題して分類するものもあるが、永州本「序上」ではそのような内容分類は感じられない。「序上」は 45 卷本「序」5 巻の前と後つまり卷 21 と卷 22 前半および卷 25 後半に当たり、本来の編次を反映している。

卷 17「序下」：卷 16 が「序上」であることによって次巻はその「下」、あるいは「中」・「下」と続く。45 卷本の卷 23・卷 24 とその前後がこれに当たる。

卷 29「状」：永州本によって編次は「進農書状」・「讓監察御史状」・「為崔中丞上宰相状」・「代人進磁器状」・「為南承嗣請從軍状」・「為京畿父老上宰相状」・「為京畿父老上府君〔尹〕状」・「為京兆府訴旱損状」・「上戸部状」・「柳州上本府状」・「上中書門下状三首」・「上裴相状」・「為廣南鄭相公奏百姓產三男状」・「為浙東薛中丞奏五色雲状」・「柳州舉自代状」・「為南承嗣乞兩河効用状」・「為裴中丞乞討黃賊上裴相状」・「柳州上中書門下状」・「為裴中丞伐黃賊轉

牒」・「為裴中丞奏邕管黃家賊事宜状」。45 卷本の 39 卷 22 篇と同収であるが、編次が大きく異なり、題名にも異同がある。永州本の編次は年代順に近く、本来の姿を反映している。

卷 30「祭文」：永州本では「状」を上下に分けないから卷 29 のみ。45 卷本では卷 39「状」の後に卷 40・卷 41 の 2 巻に分けて収める。

卷 31「非國語」上：現存は卷 32「非國語」葉 9 以下、それは「非國語」下に相当するから、その前は上巻。

卷 32「非國語」下：一部現存。

卷 33「外集」：全葉現存。この後に永州本では「後序」があるが、後人が補足したもの。他人の作を多く含む。

(6) 国内外における位置づけとインパクト、今後の展望など

30 卷本の原型は文体によって分類され、各文体内では多くが制作年代順に配するものであり、45 卷本との巻数の差は収録数の差でもあった。30 卷本は 45 卷本よりも少ないが、より重大な特徴がある。柳宗元の全作品を集成したものではなかったのは作者自身の取捨選択によるからであり、そこには作者の意志が反映されている。中でも数量差が最も顕著に現れているのが「表」であり、大半が永州本では「外集」に在る。つまり作者の遺稿ではこれらが除かれていた。その多くが長安時代、主に礼部の官僚としての代作であり、文才を買われての力作であったはずであるが、柳はこれを自分の集に入れることを潔しとしなかったのである。それらの作はいずれも駢儷の余習のある形式的な美文であった。他人の作が多く混入しているのも長安時代そのような美文を善くしたことによる。古文に転向した柳はこれらを後世に残すべきものとは考えなかったものであり、ここに文学に対する柳の態度を窺うことができる。しかるに後人は柳の意に反して肯て廃棄したものを先を争って回収したわけである。

30 卷本消失の原因もここにある。北宋末に沈晦が穆修編 45 卷本を劉禹錫原編と見做したのは、30 卷本は収録数が少なく、かつ書写を経て誤りも多く、これに対して 45 卷本は北宋初期における穆修の蒐集と校正によって整備されていたからである。以後、南宋では 45 卷本が底本の主流となる。また、その中の一つである音辯本が麻沙書坊によって南宋末に大儒朱熹の校正による『韓愈集』と共に合刊されたことで朱子学の隆盛と権威とともに普及して行き、さらに「非國語」を別集として除外した 43 卷本に改編したために 45 卷本とは別系統として考えられるようになったことによって、元明を通して最も版を重ね、あるいは底本とされて、国内外で流行した。このような背景で 30 卷本は淘汰されていったが、その実、音辯本も沈晦 45 卷本に出るものであった。

本研究最終年度 2014 年冬に尹占華・韓文

奇『柳宗元校注』(中華書局)と柳州市政府地方誌辦公室編『柳宗元著作版本圖考』(広西人民出版社)が公刊された。前者は全10冊、300万字に達し、既刊「中国古典文学基本叢書」の中でも最大級を誇る。後者は宋以後の諸版を網羅して全カラー図版をもって紹介したものであり、これほど文図並茂を尽くした巨書は、韓柳に限らず、今日まで世に問われたことがない。両書は現時点において『柳集』版本に関する集大成にして最も詳細で高いレベルにあると評してよい。しかし本研究に関する部分を見ても、30巻本の検討は固より、日本所蔵南宋永州本や北京大学蔵音辯本45巻本は未だに使用されておらず、日本所蔵音辯本45巻本の鈔本は存在さえ知られていない。今回この日本鈔本によって音辯本が本来45巻本であること、それに付けられた大量の校語が亡佚した永州33巻本に拠るもので極めて貴重であること、さらに南宋に『音註唐柳先生文集』が存在していたことを発見し、柳集研究に新しい資料を提供した。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 8 件)

「日本舊校鈔《増廣註釋音辯唐柳先生集》四十五巻本及南宋刻《音註唐柳先生集》略攷」戸崎哲彦、文史、2014-1(総106)、pp.220-251、査読有

「清代民国私家蔵『増廣註釋音辯唐柳先生集』考」戸崎哲彦、『島大言語文化』36号、2014、pp.1-43、査読無

「清内府蔵本『増廣註釋音辯唐柳先生集』考」戸崎哲彦、『島大言語文化』35号、2013、pp.1-33、査読無

「讀柳宗元《武岡銘并序》」戸崎哲彦、『中華文史論叢』2013-1(総109)、2013、pp.205-249、査読有

「南宋淳祐九年劉欽序劉怡堂輯註『増廣註釋音辯唐柳先生集』四十五巻12行本考」戸崎哲彦、『島大言語文化』33、2012、pp.1-51、査読無

「偽柳宗元手書「龍城石刻」の系統(下)」戸崎哲彦、『島大言語文化』32、2012、pp.15-49、査読有

「《題鈇鉞潭》詩非柳宗元所作」戸崎哲彦、『柳宗元研究』総14期、2011、pp.92-98、査読無

「偽柳宗元手書「龍城石刻」の系統(上)」戸崎哲彦、『島大言語文化』31、2011、pp.1-20、査読無

〔学会発表〕(計 1 件)

「日本舊鈔《増廣註釋音辯唐柳先生集》四十五巻本及南宋《音註柳集》」戸崎哲彦、唐代文学国際學術研討会、2012年8月19日-22日、新疆師範大学、烏魯木齊市

〔図書〕(計 0 件)

〔産業財産権〕 出願状況(計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕 ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

戸崎 哲彦 (TOSAKI, Tetsuhiko)

島根大学・法文学部・教授

研究者番号：40183876

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：